

米国会計学会 (AAA) 年次大会 参加報告

ASBJ 常勤委員 かわにし やすのぶ
川西 安喜



1. はじめに

2018年8月4日から8月8日にかけて米国会計学会 (American Accounting Association; AAA) の年次大会がワシントンDCで開催された。その日程の一部について、企業会計基準委員会 (ASBJ) から小賀坂副委員長と筆者が参加した。

2. 参加した主なセッション

(1) Opening Plenary Session

開会のセッションでは Bruce Mau 氏 (Freeman and Massive Change Network) が登壇した。デザイナーである彼はさまざまな制度や仕

組みの設計にも携わっており、大学経営の戦略策定にも携わったことがあるとのことである。会計については、「昔は定年を迎えるまでに多くの会計基準は変わってしまうため、学生時代に一生懸命勉強しても無駄になるといわれていたが、今では卒業するまでに多くの会計基準が変わってしまうため、学生時代にその時点での会計基準を一生懸命覚えても無駄であり、会計基準がいろいろと変わってもぶれない会計の考え方を身につけることが重要である」とコメントしていた。

(2) Evidence-Based Policy Making in Accounting: What Can We Learn From Other Fields?

このパネル・セッションのモデレーターは Robert Hodgkinson 氏 (イングランド・ウェールズ勅許会計士協会 (ICAEW))、パネリストは David Butler 氏 (National Academies of Science, Engineering and Medicine)、Mike Gurbutt 氏 (公開会社会計監督委員会 (PCAOB))、Suraj Srinivasan (ハーバード大学) であった。

このパネル・セッションでは、会計基準・監査基準の開発にエビデンスが求められる時代になったことを確認した上で、他の業界におけるルール作りから学ぶことはできないかが議論さ

れた。具体的には、医学・薬学の世界においてエビデンスがどのようにルール作りに活かされているのかについての紹介があり、議論が行われた。

(3) Teaching Accounting Judgments

このパネル・セッションのモデレーターは Mary E. Barth 氏（スタンフォード大学）、パネリストは Paul Munter 氏（コロラド大学ボルダー校）、Michael Wells（コンサルタント）であった。

学生に対して「会計上の判断」をどのように教えるのかについて、監査や会計基準の開発の経験があり、かつ、大学でも教えているパネリストから紹介がなされた。

(4) Plenary Speech: Pathway to an Integrated Conceptual Framework for Financial Reporting

2日目は Christine Botosan 氏（米国財務会計基準審議会（FASB））が Plenary Speech を行った。概念フレームワークの必要性を説いた

上で、FASB が概念フレームワークをどのように改善しようとしているのかについて解説が行われた。

3. おわりに

本年次大会が開催される直前にワシントン DC を訪れることになったため、ASBJ として初めて、本年次大会に参加させていただいたが、いろいろと学ぶことがあった。

会場では、カナダの会計基準審議会（AcSB）の方や、オーストラリアの会計基準審議会（AASB）の方にお会いした。特にカナダは関係者を招いてレセプションを開いており、本年次大会を交流の機会としていた。

最後に、FASB の Christine Botosan 氏はかつて AAA の会長を務めていたこともあり、本年次大会の参加にあたり多くの便宜を図っていただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。